

Judge Pyncheon の臭いと一つの「幸せな」結末

向井 久美子 (熊本学園大学外国語学部教授)

The Odors of Judge Pyncheon and the Indication of One “Happy” Ending Kumiko MUKAI

要 約

本論は、Nathaniel Hawthorne の *The House of the Seven Gables* (1851) に登場する、地位と権力のある傲慢な偽善者的悪人のステレオタイプと見做されてきた Judge Pyncheon を、嗅覚的な面からアプローチすることで、作品の結末に新たな解釈を加えようとするものである。19世紀中葉のコレラが蔓延していた時代のアメリカでは、公衆衛生の思想が生まれつつあり、不快な臭いは生死、宗教的には特に不道德との関わりが認識されていた。こういった時代を背景に、屋敷周辺に漂う悪臭、特に Judge Pyncheon から発せられる不快な体臭は、諸々の悪を示唆し、他の登場人物に多大な影響を与えていると推察される。Pyncheon 家を浄化し、Maule 家との宿怨を断つために、Judge Pyncheon の「臭い」を除去し、新鮮で健全な空気を取り込むことが不可欠であるとするならば、主要な人物たちが一時期屋敷を離れてまた戻ってくるという、取ってつけたような結末の筋書きも納得でき、筆者が本作のクライマックスの場面の一つで Clifford に代言させた "an ascending spiral curve" の概念とも符号するものである。本論では、Judge Pyncheon に纏わる嗅覚的な表現の分析を通して、両家にとって一つの「幸福な」結末が訪れたと解釈できることを論じる。

はじめに

The House of the Seven Gables (1851) の Judge Pyncheon は、典型的な偽善者や悪の象徴として描かれており、最終的に劇的な死を迎える人物である。彼は先祖の呪いや血の臭いから逃れられず、その死の場面を "anti-picturesque" やグロテスクなゴシック・ホラー (Levy 155; Scheick 145) と解釈されたり、利己的で本能むき出しの特徴が取り上げられ、"Hawthorne's finest achievement of a villain interested only in material gain" (Luecke 557) や、"His gross, animal qualities so enchain him that there is no room for the spiritual. . . Judge Pyncheon is a sensualist 'selfish in essence'" (Beebe 9) などと指摘され、これまで中心的に論じられることは少なく、他の人物との複雑な関わりや物語全体に及ぼす影響は少ない脇役と考えられてきた。¹

こうしたステレオタイプの Judge Pyncheon のイメージを、Julie Wilhelm は、その行動やアイデンティティはありきたりで予測でき、"The humorous word-picture of the late Judge Pyncheon fixes the character of the Judge once and for all, but only because he is fixable, more automaton than human (in life and in death)" (129) と結論づける。しかしながら、本論で注目する Judge Pyncheon の「臭い」は、「人間」ゆえに発されるものであり、特に動物的な本能との関わりの表現で顕著に認められると考える。² つまり、彼はその存在だけでなく、肉体から発散される臭いが、他の登場人物たちに不快さのみならず恐怖心までも増幅させ、単なるイメージを超えた不気味な人物像を醸し出し、作品全体にも暗い靄を纏わせているのである。

従って、七破風の屋敷内やその周辺から Judge Pyncheon の臭いを取り除くことは、過去の悲劇を思い起こさせる大きな要素を一つ消すことになり、何世代にもわたって続いていた Pyncheon 家と Maule 家の確執や呪いを乗り越えることにもつながると考えられる。しかしながら、結末で両家の若い二人が結ばれることで長年の宿根を安易に帳消しにしようとしている感があるのは否めない。Holgrave は、人生観の急変を示すと同時に、屋敷の浄化と、一族の再生と健全な空気をもたらす「幸せ」について、Phoebe に吐露する。

This old house, for example, which sometimes has positively oppressed my breath with its smell of decaying timber! And this garden, where the black mould always clings to my spade, as if I were a sexton, delving in a graveyard! Could I keep the feeling that now possesses me, the garden would every day be virgin soil, with the earth's first freshness in the flavor of its beans and squashes; and the house!—it would be like a bower in Eden, blossoming with the earliest roses that God ever made. (214; vol. 2, ch. 14)

物語終盤における Holgrave の保守主義への思想の急転換 (314; vol. 2, ch. 21) については、"curious conversion" (Von Abele 58-70) や "basic flaw" (Hoffman 201) などと指摘される。また安易な完全懲悪と棚ぼた的な結末は "merely the most optimistic. It is the comic view where all ends well." (Stubbs 119) と厳しく捉えられることが多く、結末の解釈に不安が残るという指摘 "Yet the threat of violation will remain in the text. . . By concluding with the entrance of the bridal couple into the serpent's home, the novel warns that the Pyncheon's new Eden might once again face the threat of penetration (Goddu 126)" も説得力があり無視できない。ただ、においの面から考えると、屋敷の素材を木造ではなく石造りにする場合の方が、嗅覚的な不快さははるかに少なくなるのは間違いない。

本論で扱う Judge Pyncheon の悪臭は、必ずしも物理的嗅覚に訴えるものだけではなく、モラルの腐敗による象徴的な悪臭も含んでいる。ただ、どちらの場合も除臭する基本的な方法は、悪臭の元をなくし、その悪臭が立ち込めている場所の空気を入れ替えることだと考えられる。主な登場人物たちが物語の結末の土壇場でしばらくの間屋敷から引越すが、その当面の新しい住まいとなる Judge Pyncheon の田舎の別荘ならば、それほど悪臭に悩まされることはないだろう。Holgrave が主張するように (184; vol. 2, ch. 12)、屋敷を灰になるまで燃やしてしまえば、Judge Pyncheon の悪臭は屋敷もろとも完全消し去ることができるはずである。しかし、Pyncheon 家の老いた Hepzibah と Clifford にこのような過激な浄化方法

を期待することは難しい。若い世代の Phoebe と Maule 家の Holgrave が、どこまで除臭を徹底して行くことができるかにかかっているととも言える。

従って本論では、Judge Pyncheon の死によって、この物語の結末を単に邪悪な存在が減り、生き残った Pyncheon 家の人々と Maule 家の末裔の和解によって長年の遺恨が解消され平和が訪れるという機械仕掛けの大団円ではなく、「悪臭」のない清新な空気の中に訪れた平穏な一つの「幸せ」という観点から考察していきたいと思う。

1. においの背景

そもそも嗅覚は、人類の進化のプロセスでもそれほど変化が認められない上、聴覚や視覚のような <高級> な感覚とは異なり、進化論的に最古の感覚で直接脳とつながっており、感情の表出や知覚機能や認識機能にまで影響を及ぼす (イエリネク 67)。つまり嗅覚は、即時的であって理性的というよりは感情的な感覚であるため、言葉での説明は難しい。そのため直接嗅覚がテーマとなっている Patrick Süskind の *Perfume: The Story of a Murderer* (1985) や Kathleen Tessaro の *The Perfume Collector: A Novel* (2013) などは別として、これまでにいはいは、過去の記憶を本能的に想起させるといった無意識の影響、いわゆるプルースト現象が時おり扱われていた程度だったと考えられる。³

また、嗅覚が <高級> な感覚でないと言われる理由には、十九世紀の西洋社会において、においに男女差が必要であったことが挙げられる。男性が香水をつけるなどは忌むべきもので、健康な肌の匂いとタバコの匂いで十分であり、せいぜい松や杉など森の香りが許されていた一方、女性は花の香りや甘い香りをつけるべきだとされていた。この影響によって、香水だけでなく嗅覚そのものが女性の領分とされ、そのために嗅覚の価値が下がり、視覚こそが科学の感覚となったのである。(Classen, Howes, and Synnott 83-84) 従って、当時においについて小説の中で表現することが <高級感> を損なうことになるという考えが、男性作家 (Hawthorne も含めて) になかったとは言えないのであり、こうした影響によっても、嗅覚的表現がそれほどテーマとして扱われなかったと推測される。

しかしながら、歴史的には古代からキリスト教において、においには霊的なあるいは治療的な力があるとされ、疫病に対する香料の役割が認識され、芳香と悪臭の戦いが行われていた。十九世紀のロンドンやパリなどのヨーロッパの都市に関しては、Alain Corbin のいう「嗅覚革命」(olfactory revolution) によって、"fragrance had moved out of the realms of religion and medicine into those of sentiment and sensuality" (Classen, Howes, and Synnott 6-7) となり、文学における嗅覚表現はリアリストにもシンボリストにも、非常に重要な役割を果たすことになる。⁴ また、においと "moral status" に関連して、信頼のおけない人間を "stinker", "stinkoe", "stinkpot" と呼び、逆に徳の高い人間は "odor of sanctity" を発している (Largey and Watson 1021-22) と直接的な表現が使用される。Hawthorne は "Lady Elenore's Mantle" (1838) の中で疫病について言及し、その人間性を奪う恐ろしさや、汚れた空気と血の色とを関連させて述べ、疫病の毒された空気と神の采配と人間性の墮落を連想させている。

"There is no other fear so horrible and unhumanizing as that which makes man dread to breathe Heaven's vital air, lest it be poison, or to grasp the hand of

a brother or friend, lest the gripe of the pestilence should clutch him. . . This conqueror had a symbol of his triumphs. It was a blood-red flag, that fluttered in the tainted air, over the door of every dwelling into which the Small-Pox had entered." (283-84; vol. 9)

ここでの疫病を感染させる空気には、直接物理的に臭いの表現というものはないが、不吉な悪臭をまき散らす Judge Pyncheon の周辺に漂う空気と類似するような臭いが想起させられる描写が認められる。恐怖心と人間性が奪われるほど陰鬱な空気は、神に背く悪行を行ったことをほめかしているようにも思われる。

十九世紀初めに体臭を防ぐという認識が一般にも広がるが、特にイギリスのピューリタンにとって、不潔や不純は神の恩寵からはずれ、人間の劣等さを示すもの (イェリネク 78) と解釈されていたため、階級と身体のおいに関わりがあった。また、Katherine Ashenburg によれば、当時のアメリカは衛生先進国であり、イギリスとは違って階級制度がないため、礼儀正しさやステータスを公平に示す手立てとして清潔で身ざれいということが判断基準となり、十九世紀終盤の数十年までには、清潔と経験が国民らしさと固く結びつくようになっていた。(193)⁵ 伝染病が蔓延していた十九世紀末までの西欧諸国では、臭いと生死との間に非常に密接な関係 (ゲレ 10) が見出されていたものの、現代のようなプロの医者はおらず、迷信や妄信が通用し (Lucier 705)、科学的な根拠は確立されてはいなかった。

従って、Judge Pyncheon はその死因に関しても、"a case of apoplexy" (16; vol. 2, ch. 1) と一応特定されているが、代々 Pyncheon 家の当主の死は、幽霊話の一場面でもあるかのように描かれ (Ringe 157-59)、本当の死因は怨念や呪いなどのオカルト的なものだと示唆される。また当時の公衆衛生の状況を考えれば、他の病気の可能性も十分ある。彼の存在とその臭いがこの屋敷の住人たちに及ぼすネガティブな影響力は、この時代に蔓延っていた流説である一種のミアズマ (瘴気) のような、これまで認識されなかった興味深い存在として、新たな解釈も加えられるのではないかと思われる。

Hawthorne 作品とミアズマの概念は、いくつかの点で関わりが認められる。欧米では十九世紀に至るまで、病気を道徳的な汚点と関連づけ、墮落した人間の魂が放つ腐敗臭がペストをまねくと多くの人々に信じられていた (ゲレ 58-59)。従って科学的な感覚は視覚であるのが常識であった当時の科学者にとって、においが、宗教や民族や錬金術に属した領域において重要なテーマとなり、実際、科学的関心をそそったのも腐敗臭であった (Classen, Howes, and Synnott 88-89)。またコレラは 1830 年代には原因不明の謎の病気であったが、1860 年代には一部ではあっても医療で治すことができるものになっていた (Rosenberg 4-6) ことを考えると、ちょうどコレラ発生から収束までが、Hawthorne が作家として活動した時期と重なり、*The House of the Seven Gables* 執筆時はその只中であったことになる。アメリカで 1832 年と 1849 年に流行したコレラに関して、腐敗しかかった肉体から発散する臭いが、病気の源と信じられ、換気が重要だと考えられるようになる。また疫学者 William Budd は、1858 年のロンドンを窒息させた "Great Stench/Stinch" を歴史上の事件として記録されるほどの悪臭と述べており (エンゲン 12)、Hawthorne も当時の様子を、1858 年 9 月 3 日付けの James T. Fields に宛てた手紙に "London is like the grave in one respect—any man can make himself at home there; and whenever a man finds himself homeless elsewhere, he

had better either die or got to London" (151; vol. 18) と記している。

当時コレラの原因について、イギリスの John Snow 医師が指摘する汚染水 (Halliday 1469) という説があったものの、1858 年までは公けに受け入れられていなかった。これは、ミアズマがチフスやコレラなどの伝染病の原因と深く関わり、悪臭が病気の原因であるという思い込みが広がっていたためであり、1854 年に流行したコレラも、空気の腐敗という概念と人々の恐怖心が依然として原因になっていた (ゲレ 79-80)。⁶ その上、十九世紀中頃までのアメリカでは、においに関する認識や公衆衛生などに関する文化的背景や生活は過渡期であったと考えられ、現在では耐えられないような激臭も存在したはずであるが、嗅覚が主観によるものでもあり、これまで見過ごされてきたという指摘もある (Chiang 405)。確かに十九世紀アメリカの衛生状況を考えると、都市の富裕層を除いて、現在の状況とは比較にならないほど劣悪な環境であり、また重労働であった洗濯もまめに行われていたとはいえ、体臭のみならず衣類からの臭いや、かみ煙草の汁が絨毯に染みついた臭いや、暖炉の周辺や水回りからも悪臭が漂っていたはずである。

例えば七破風の屋敷の外のおいに関して、安息日の朝に教会の鐘の音が鳴り渡り、周辺の空気のおいと、神聖さや精神性との関連が描出されている。ここには甘美なおいが神の恩恵として屋敷の周辺にも満ち溢れ、祈りを捧げるものの心を爽やかな気分で充たしているようである。

"The church-bells. . . were calling out, and responding to one another. . . and flinging their accents afar off, to melt into the air, and pervade it with the holy word. The air, with God's sweetest and tenderest sunshine in it, was meet for mankind to breathe into their hearts, and send it forth again as the utterance of prayer." (167; vol. 2, ch. 11)

しかしながら、この描写とは明確なコントラストを顕示するかのようには、Judge Pyncheon は、生命力に満ちた人間として、さまざまな強い欲を溢れさせ、その生々しい臭いによって、moral status の低さや動物的で < 低級 > な嗅覚を刺激させる臭いの持ち主として浮き彫りにされるのである。

2. 「生」の臭い

生前の Judge Pyncheon は、その社会的地位からも分かるように、それなり的高级な酒類や葉巻やタバコなどのおいを発散していた描写が認められ (273-76; vol. 2, ch. 18)、その経済力によって何らかの方法で清潔を保つことができたはずであるから、たとえ事実とは異なっても、通俗的なカルヴァン派的な見方をすれば、信心深く見えていたかも知れない (Hoy 15)。また、Pyncheon 家の創設者のピューリタン軍人で治安判事の Colonel Pyncheon と同様、Judge Pyncheon も表向きは高潔でステータスも高い人物であるが、"to a somewhat massive accumulation of animal substance about the lower region of his face, the look was perhaps unctuous, rather than spiritual, and had, so to speak, a kind of fleshly effulgence" (116; vol. 2, ch. 8) と、隠し切れない動物的な部分が顔の一部に露呈してしまっている。酒類や肉類の溢れた食卓とそこから漂ってくる様々なにおいは、反ピューリタンの豪華な生活を直接反映しているかのようである。食欲に関連して、彼特有の体臭を発散して

いる表現もあり、これは "gluttony" をも想起させるものである。

また、このような gluttony を満たす描写に加えて、Phoebe のような乙女を戸惑わせる「雄」という性を感じさせる表現もある。例えば、"The man, the sex, somehow or other, was entirely too prominent in the Judge's demonstrations of that sort. Phoebe's eyes sank, and, without knowing why, she felt herself blushing deeply under his look. (118; vol. 2, ch. 8)" において明らかである。さらに、彼女は "the sultry, dog-day heat, as it were, of benevolence, which this excellent man diffused out of his great heart into the surrounding atmosphere; —very much like a serpent, which, as a preliminary to fascination, is said to fill the air with his peculiar odor" (119; vol. 2, ch. 8) と Judge Pyncheon から発散される蛇のような独特な臭いと、彼の周辺に漂う鬱陶しく暑苦しい空気に圧倒される。この不愉快な臭いは、「乙女」の Phoebe だけでなく、"It was quite otherwise with Hepzibah; the Judge's smile seemed to operate on her acerbity of heart like sunshine upon vinegar, making it ten times sourer than ever. (128; vol. 2, ch. 8)" と、その笑顔ですら、夏場のむせかえるような酸っぱい刺激臭が想起させられるものである。

こうした表現によって、おそらく Judge Pyncheon には、フェロモンと考えられるアンドロステノン類の臭気が漂っていたのではないかと推測される。この動物的な臭いは、現在では香水にも利用されることがあり、嗅ぐ人によっては、性的魅力を感じさせたり、逆に強い睡眠妨害効果をもっているものでもある (イェリネク 120-22)。⁷ Phoebe にとっては、説明のできない不愉快な臭いとして困惑したものであろうが、その鋭い嗅覚とにおいの経験がのちに Holgrave Maule を受け入れることと無関係ではないように思われる。Holgrave は、屋敷に来てしばらくは Hepzibah に正体不明の怪しい人物とみなされ、"come-outers... who acknowledged no law and ate no solid food, but lived on the scent of other people's cookery (84; vol. 2, ch. 5)" とにおいと関連も少し示される。彼は経歴も謎で、転々と職を変え、"He had subsequently travelled New England and the middle states as a pedler, in the employment of a Connecticut manufactory of Cologne water and other essences (176; vol. 2, ch. 12)" と、コロンの香りが身体や衣服に染みついていたのかもしれない。本当の「におい」を察知されずに、敵の末裔であるという正体を隠すことができたのかもしれない。もし仮に体臭があったとしても、後に二人が結ばれることを考えれば、Phoebe にとっては不快に感じられてはいなかったはずである。

3. 「死」の臭い

フェロモンの臭いは、言わば「生」のにおいの代表格であるが、Judge Pyncheon は、この世を去る直前まで強烈な「生」の臭いを発散させながら、一転「死」の臭いを放つことになる。彼は、物語の終盤で Colonel Pyncheon と同様に血を吐いて死んでいるところを発見される。Pyncheon 家と Maule 家の確執の末、Matthew Maule は処刑の瞬間に Colonel Pyncheon に "God will give him blood to drink!" (8; vol. 2, ch. 1) と呪いの予言を放って以来、屋敷には血の臭いと恐怖のイメージ "The terror and ugliness of Maule's crime, and the wretchedness of his punishment, would darken the freshly plastered walls, and infect them early with the scent of an old and melancholy house." (9; vol. 2, ch. 1) が植え付けられる。

Colonel Pyncheon はその呪いの予言や「悪霊」は多少なりとも気にはしながらも、"Had he been told of a bad air, it might have moved him somewhat; but he was ready to encounter an evil spirit, on his own ground." (9; vol. 2, ch. 1) と、むしろ「悪い空気」の方が現実的な恐怖として身に迫っていたことをほのめかしている。

Judge Pyncheon は、呪いの予言通りの「死」を迎え、死の臭い、つまりは血の臭いを発していたと考えられる。発作的な吐血ではなく、血液を体外に出すことそのものは、十八世紀以前よりは盛んではないものの、十九世紀中葉でも行われていた瀉血 (blood-letting) が連想される。「清浄な肉体」を保つためのアロマセラピーには欠かせない補助手段であり、良い香りと鮮血の組み合わせは、病気に対するもっとも確実な保証手段だと考えられていた時期もあった (ゲレ 132)。つまり、瀉血を思い浮かべた場合、Colonel Pyncheon が流血していた死の場面も、完全に恐怖の印象だけでなく、当時コレラの治療にも使用されていたこともあり (Vogt 45)、体内の毒気や悪が外へ排出されたという、一種の「浄化」のイメージで解釈することも不可能ではないのである。当時著名なフィラデルフィアの医師 Benjamin Rush (1745-1813) は瀉血の信奉者であり、黄熱病の治療を行っていた (Greenstone 13)。また、E. Copeman は "It will be remembered by some present, perhaps, that in 1845 I published a book on *Apoplexy*, in which I endeavoured to prove that indiscriminate bloodletting was much to be deprecated in the treatment of that disease." (932) と、瀉血が脳卒中の治療に使用されていたことを記している。屋敷にはびこる悪を浄化するためには、ゴシック的な呪いで始末したとも考えられるが、瀉血という当時の医学的な治療が当時のアメリカでも行われていたのかもしれない。Holgrave は、意味ありげに次のように言う。

"Human blood, in order to keep its freshness, should run in hidden streams, as the water of an aqueduct is conveyed in subterranean pipes. In the family-existence of these Pyncheons, for instance—forgive me, Phoebe; but I cannot think of you as one of them—in their brief, New England pedigree, there has been time enough to infect them all with one kind of lunacy or another!"
(185; vol. 2, ch.12)

Judge Pyncheon の死の少し前の場面で、その死体の持ち主の偽善的な人間性の醜さと悪臭をまき散らしている様子が表現され、ここには、腐敗した水や血液がミアズマ的なイメージとして残り、特に、Judge Pyncheon の moral status の低さと悪臭の関係が、湿気の含んだ不愉快な臭いで表現されている。またこの先に起こる悲劇が、本人の人格に起因していると示唆される。

We are to seek the true emblem of the man's character, and of the deed that gives whatever reality it possesses, to his life. And, beneath the show of a marble palace, that pool of stagnant water, foul with many impurities, and perhaps tinged with blood—that secret abomination, above which, possibly, he may say his prayers, without remembering it—is this man's miserable soul!
(230; vol. 2, ch. 15)

贅沢を極めた豪華な食卓の描写に、Judge Pyncheon の動物的な食欲、つまりは「生」のイメージが強調される一方で、死臭が発散されるため、豪華な食卓の食欲をそそる匂いとそ

の悪臭の対比がイメージされる。(273-74; vol. 2, ch. 18) Judge Pyncheon の遺体を前にしながら、その生前の食欲を "ogre-like" と譬えられ、"his Creator made him a great animal, but that the dinner-hour made him a great beast. Persons of his large sensual endowments must claim indulgence, at their feeding-time" (275; vol. 2, ch. 18) とおそらく人並みはずれた食欲さで肉食の獣をイメージされているが、ここから一転、死のイメージへと移る。

その転換地点が、目を見開いている死んでいる Judge Pyncheon の顔の周りを飛び回っている一匹の蠅の描写である。悪と疾病の運び手である蠅は、悪魔 Beelzebub、つまり 'lord of fly' を連想させる。動きと音の動と静のコントラストは、まさに生から死へ転落し、その不吉な音までもイメージさせているようである。

And there we see a fly—one of your common house-flies, such as are always buzzing on the window-pane—which has smelt out Governor Pyncheon, and alights now on his forehead, now on his chin, and now, Heaven help us, is creeping over the bridge of his nose, towards the would-be chief-magistrate's wide-open eyes! Canst thou not brush the fly away? Art thou too sluggish? Thou man, that hadst so many busy projects, yesterday! Art thou too weak, that wast so powerful? Not brush away a fly! Nay, then, we give thee up! (283; vol. 2, ch. 18)

ここには、悪が無残に滅びる際の芝居がかった表現が認められ、まるで他人事のように冷淡な傍観者が死体の様子を物語っているかのようであり、やや強い口調で死者に鞭打つような映像までも想起させられそうである。屋敷があらゆる意味で浄化される、嵐の前の静けさの中で、"The death of the Judge has the effect of miraculously releasing the natural world into the expression of its full power and beauty. The elm no longer conceals an ugly reality, but becomes the symbol of a mystical, redemptive power." (Levy 156) という解釈もある。つまりは、彼の死によって、屋敷の周辺に本来の自然が蘇り、それが空気の浄化と一族の平穏な生活につながると考えられるのである。

最後に

以上により、Judge Pyncheon は生前も死後も嗅覚を刺激するにおいと強く関わっていたことが分かる。彼から発散される不愉快なミアズマ的臭いは、か弱き Clifford や Hepzibah にとっては恐怖さえ感じさせるものだったと考えられる。また古く陰鬱な屋敷に漂うかび臭さや湿気を帯びた臭いは、若い乙女 Phoebe の匂いや庭の花々の香りによって和らげられ、物語全体としては多少なりとも嗅覚的なイメージを持つ表現のバランスがとられているように思われる。さらに、Judge Pyncheon の一人息子が帰国する直前にコレラで亡くなることが最終章で明らかとなるが、財産は全て生き残った Pyncheon 家の Hepzibah と Clifford と Phoebe に残されることになり、Maule 家の末裔 Holgrave も含めた両家の和解と「幸せ」な未来に現実性を帯びる。

Judge Pyncheon に冤罪を着せられた Clifford は、無意識にも "happy" や "happiness" を繰り返しながら、それほど長くない残りの未来に一縷の望みを託そうとする一方、Hepzibah は、慣れきった悪臭の漂う屋敷と過去の呪縛から逃れて生きようという勇気が持てず、社会

の進歩を歓迎することもできない。そんな Hepzibah に Clifford は、「幸せ」な未来にはまらずこの屋敷に新鮮な健全な空気が必要だと主張する。

"The soul needs air; a wide sweep and frequent change of it. Morbid influences, in a thousand-fold variety, gather about hearths, and pollute the life of households. There is no such unwholesome atmosphere as that of an old home, rendered poisonous by one's defunct forefathers and relatives!" (261; vol. 2, ch. 17)

過去の Pyncheon 家がまき散らしていた悪臭や Judge Pyncheon の死臭を完全に消し去ることは難しい。悪臭の上に他の強い臭いでマスキングすることで、もとの悪臭をあまり感じなくなるという程度のもものかもしれない。また屋敷を新たに石造りで建て直すということも可能かもしれないが、屋敷に根深く染み込んだ土壌も、生き残ったか弱き善人たちに影響を及ぼすのかどうかも考えなければならない。

Judge Pyncheon の陰鬱な臭いを除去し、屋敷の周辺に漂う悪運に満ちた不吉なミアズマ的悪臭を取り去ってしまうことで、屋敷には平穏な幸せが訪れたことが物理的にも認識されることになるのである。Pyncheon 家の被害者たちともいべき Clifford と Hepzibah は、長年にわたって「悪臭」(Judge Pyncheon) に苦しめられながら、これまで何もできずに、ただひたすら我慢してきた。それが運命であると諦め、その「悪臭」に慣れてしまっていたところに、若い Phoebe や Holgrave という新しい風が吹いてきたことで、風通しがよくなり、再び臭いを感じ始め出し、その臭いから逃れたいという気持ちから、一旦屋敷を出るといった冒険的行動も果たせた。ここには、Clifford が偶然に同乗した全く赤の他人にふるった熱弁に、人間の進歩についての一種の楽観主義とも称することができる "an ascending spiral curve" (259; vol. 2, ch. 17) の概念が反映されていると考えられる。過去の呪縛から解放されて、すぐには実感されずとも、やがては上昇していることが認識されるという筆者の独特な発想である。Judge Pyncheon が死んでも、Pyncheon 家に纏わる過去の罪が全て帳消しになることはないため、悪臭は <完全に> 消え去ることは非常に難しい。屋敷の楡の木は永遠に "unintelligible prophecies" (317; vol. 2, ch. 21) を呟くであろうし、訪れた「幸せ」が「当面の」"this present happiness" (317; vol. 2, ch. 21) と念を押したように語られているのも、いかにも疑り深いホーソンらしい言い方である。

Summary

Judge Pyncheon, in *The House of the Seven Gables* by Nathaniel Hawthorne, has been recognized as a stereotypical, hypocritical villain. However, considering him from the perspective of olfactory expressions and metaphors, he seems to offer several significant implications that can suggest a new interpretation of the ending of this romance. In mid 19th-century America, cholera was prevalent and the awareness of public health was increasing. Unpleasant odors were thought to be connected with the concept of death, and specifically immorality, in Puritan society. There are many odors around the House, and Judge Pyncheon in particular emitted foul ones, both in life and in death. His odors projected negative associations and influenced other characters' lives. Therefore, the purification of the Pyncheons and the settlement of the age-long feud may depend on removing the bad odors and taking in fresh and healthy air. It is possible to accept this awkward plot, that the main characters left the House and returned only at the very ending of the story, because it seems to correspond with Hawthorne's key concept of "the ascending spiral curve." Thus, Judge Pyncheon's bad odors can indicate at least one "happy" ending in this romance.

注

*本論の書式は、*MLA Handbook for Writers of Research Papers, Eighth Edition* (2016) に準拠する。

- 1 Judge Pyncheon を中心に扱っている論文は、Alfred H. Marks の死因を究明するもの、Kenneth Marc Harris の偽善性を考察するもの、Jonathan A. Cook の実在のモデルについて論じているもの、しかないと考えられる。
- 2 *Seven Gables* のテキスト内では、においに関する表現として主に air, effusion, fragrance/ fragrant, infusion, nostril, odor/ odoriferous, perfume, rusty, scent, smell が使用され、悪臭を示す stink や stench は登場しない。本論では、不快な好ましくないにおいを〈臭い〉、良い好ましいにおいを〈匂い〉、天然や人工に限らず作られた匂いを〈香り〉、また美的に作られた香りを〈フレグランス〉とし、これらでは明確に分類できない一般的なにおいを〈におい〉と区別する。本論のにおいに関する定義とそれを示す日本語については、狩野博美の分類と用語の使用を参考にしている。cf. イェリネク 16.
- 3 フランスの小説家 Marcel Proust の長編小説『失われた時を求めて』 (*À la recherche du temps perdu*, 1913-27) の第一巻の中での主人公のエピソードがもとになって、人間はあるにおいを最初に嗅いだ時の経験が、思い出と共に記憶の中に蓄えられる傾向が顕著だというもの。再度そのにおいを嗅いだ時に記憶の残像が情緒的効果を伴って想起され、また、あるにおいを嗅いで心地よい匂いや香りを認識すると、気分と行動の両方に肯定的な効果をもち、不快な臭いを感じて落ち込んだ気分になるという科学的裏付けもある (イェリネク 19-20, 34)。また、においは記号としての意味を持ち、コミュニケーションの機能を果たすこともある。生物学的なホルモンに関わるにおい、原型的な太古の経験から普遍的に受け止められるにおい (例えば、煙の臭いが災害に結び付くような不穏な連想を起こさせるなど)、ある特定の人に強く作用する個人的な経験に関わるにおいなどがある (イェリネク 48-50)。従って、本論における Judge Pyncheon に関わる臭いも、過去の記憶を呼び起こすものや、実際にその時に感じるものなど、いくつかの種類に及んでいると考えられる。
- 4 "Literary odours... served both Realists, who employed them to give their writings the pungent scent of truth, as well as to make moral statements, and Symbolists, who transformed them into lush, emotion-laden images to convey and essence of dreams (or nightmares)." (Classen, Howes, and Synnott 86)

- 5 アメリカ人が、清潔と水を結び付けた「水治療」も、1820～60年代が最も盛んに行われており (Legan 74)、Hawthorne も作品の背景として意識していた可能性がある。
- 6 こうした非科学的な迷信がミアズマの理論そのものであり、19世紀末の Pasteur の細菌の研究が進むまで続いた。(Classen, Howes, and Synnott 89)
- 7 人間の内分泌バランスや気分や態度や行動に影響を与えるものと考えられている。ただし人間のフェロモンについては、まだ完全にその研究が定着しているわけではなく、動物をモデルにして、人間行動を説明する上での整合性はあるものの、個人差があり、別の説明原理も可能であり、当然フェロモンのおいを嫌う人もいる (エンゲン 182)。

引用文献

- Ashenburg, Katherine. *The Dirt on Clean: An Unsanitized History*. North Point P, 2007.
- Beebe, Maurice. "The Fall of the House of Pyncheon." *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 11, no. 1, 1956, pp. 1-17.
- Chiang, Connie. "The Nose Knows: The Sense of Smell in American History." *The Journal of American History*, vol. 95, no. 2, 2008, pp. 405-416.
- Classen, Constance, David Howes, and Anthony Synnott. *Aroma: The Cultural History of Smell*. Routledge, 1994.
- Cook, Jonathan. "'The Most Satisfactory Villain That Ever Was': Charles W. Upham and *The House of the Seven Gables*." *The New England Quarterly*, vol. 88, no. 2, 2015, pp. 252-285.
- Copeman, E. "On Bloodletting." *The British Medical Journal*, vol. 2. no. 989, 1879, pp. 932-933.
- Goddu, Teresa. "The Circulation of Women in *The House of the Seven Gables*." *Studies in the Novel*, vol. 23, no. 1, 1991, pp. 119-127.
- Greenstone, Gerry, MD. "The History of Bloodletting." *British Columbia Medical Journal*, vol. 52, no. 1, 2010, pp. 12-14.
- Halliday, Stephen. "Death and miasma in Victorian London : an obstinate belief." *British Medical Journal*, vol. 323, no. 7327, 2001, pp. 1469-1471.
- Harris, Kenneth Marc. "Judge Pyncheon's Brotherhood": Puritan Theories of Hypocrisy and *The House of the Seven Gables*. *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 39, no. 2, 1984, pp. 144-62.
- Hawthorne, Nathaniel. *The House of the Seven Gables*. Edited by William Charvat, et al, The Centenary Edition, vol. 2, Ohio State UP, 1965.
- . vol. 9, Ohio State UP, 1974.
- . vol. 18, Ohio State UP, 1987.
- Hoffman, Daniel. *Form and Fable in American Fiction*. 3rd ed., Oxford UP, 1994.
- Hoy, Suellen. *Chasing Dirt*. Oxford UP, 1996.
- Largey, Gale Peter and David Rodney Watson. "The Sociology of Odors." *American Journal of Sociology*, vol. 77, no. 6, 1972, pp. 1021-1034.
- Legan, Marshall Scott. "Hydrophathy, or the Water-cure." *Pseudo-Science and Society in 19th-Century America*. Edited by Arthur Wrobel, The UP of Kentucky, 1987, pp. 74-99.
- Levy, Leo. B. "Picturesque Style in *The House of the Seven Gables*." *The New England Quarterly*, vol. 39, no. 2, 1966, pp. 147-160.
- Lucier, Paul. "The Professional and the Scientist in Nineteenth-Century America." *The History of Science*

- Society*, vol. 100, no. 4, 2009, pp. 699-732.
- Luecke, Jane Marie. "Villains and Non-Villains in Hawthorne's Fiction." *PMLA*, vol. 78, no. 5, 1963, pp. 551-558.
- Marks, Alfred H. "Who Killed Judge Pyncheon? The Role of the Imagination in the House of the Seven Gables." *PMLA*, vol. 71, no. 3, 1956, pp. 355-369.
- Milder, Robert. "Hawthorne's Winter Dreams." *Nineteenth-Century Literature*, vol. 54, no. 2, 1999, pp. 165-201.
- Ringe, Donald A. *American Gothic. The UP of Kentucky*, 1982.
- Rosenberg, Charles E. *The Cholera Years. The U of Chicago P*, 1987.
- Scheick, William J. "The Author's Corpse and the Humean Problem of Personal Identity in Hawthorne's *The House of the Seven Gables*." *Studies in the Novel*, vol. 24, no. 2, 1992, pp. 131-53.
- Stubbs, John Caldwell. *The Pursuit of Form*. University of Illinois Press, 1970.
- Vogt, Donald D. "TRENDS in 19th Century American Cholera Therapy." *Pharmacy in History*, vol. 16, no. 2, 1974, pp. 43-53.
- Von Abele, Rudolph. *The Death of the Artist*. Martinus Nijhoff, 1955.
- Wilhelm, Julie. "Comical Reflections and Delayed Affect in *The House of the Seven Gables*." *Nathaniel Hawthorne Review*, vol. 41, no. 2, 2015, pp. 112-37.
- J・シュテファン・イェリネク 『香りの記号論』 狩野博美訳, 人間と歴史社, 2002.
- T・エンゲン 『匂いの心理学』 吉田正昭訳, 西村書店, 1990.
- アニック・ル・ゲレ 『匂いの魔力』 今泉敦子訳, 工作舎, 2000.